

第 144 話〈集落ぐるみ鉍毒病〉の要約と参考資料

第 144 話〈集落ぐるみ鉍毒病〉の要約

「集落ぐるみ鉍毒病」「大型公害病」という見出しに、土呂久公害が全国ニュースになったことの驚きとともに、その過大な表現は実際とは違うと感じました。地元宮崎支局に知らせることなく、誰がどんなふうにかこの記事を書いたのか、疑問が解けたのは 14 年後でした。

第 144 話〈集落ぐるみ鉍毒病〉の参考資料

1 4 4 - 1 佐藤鶴江日記にみるマスコミの取材

1971 (昭和 46) 年

11 月 9 日 (火) 夕方、福岡新聞記者来た

11 月 16 日 (火) 林記者来られ、1 時話し、姉と共に実地検査。夕方、又 2 人の別の記者が来られた。

11 月 20 日 (土) 朝一度起きて、又寝てたら、NHK より来られた。

11 月 27 日 (土) NHK より 2 人来て、録音、写真とる。

11 月 29 日 (月) (東京) 朝日新聞記者、塩田記者来た。

1972 (昭和 47) 年

1 月 17 日 (月) 朝日放送記者来た。

1 月 18 日 (火) 夜、朝日放送来た、4 人連れ。

1 月 19 日 (水) 朝から新聞記者次々来た。

1 月 20 日 (木) 朝 7 時起き、7 時 25 分の宮崎の窓 (102) 見る。

1 月 21 日 (金) 夕方、放送記者、小倉からも来た。

1 月 22 日 (土) 夕方、夕刊ポスト来た。記者来た。

1 月 23 日 (日) 品田ポスト来て写真とる。

1 月 24 日 (月) 帰って記者、田崎さん来た。色んな人から電話かかった。

1 月 25 日 (火) 佐々木、関家記者来た。

1 月 26 日 (水) NHK よりロク音撮影した。

1 月 27 日 (木) 九州朝日放送よりテレビカメラとる。

1 月 28 日 (金) 朝 7 時起き、1 日中坐りづめ。テレビカメラ、東京放送、熊本放送、宮崎放送来た。

2 月 3 日 (木) 午後、東京フジテレビ来る。

2 月 7 日 (月) 福岡 TBY 来た。

2 月 13 日 (日) 福岡テレビ来て撮影。

- 2月18日(金) 夕方、記者何人か来た。
2月19日(土) 川原・三上さん来た。
7月28日(金) 夜、新聞社より電話あり。
7月29日(土) 午後共同通信の金田さん来られ、夕方まで居られた。
7月30日(日) 共同通信の金田さん今日も来た。
7月31日(日) 公害の発表県にある。私、秀男宮崎放送局102スタジオ。
8月1日(月) 朝NHKへ出る。
8月2日(火) 川原さん来た。
8月4日(金) 宮崎テレビUMK来た。

144-2 土呂久報道を全国化した朝日新聞の記事

1972年1月17日朝日新聞東京本社(夕刊) トップ

「高千穂町に大型公害病 / 50年間に100人若死に / 鉱山の亜ヒ酸が原因？」

宮崎県西臼杵郡高千穂町の土呂久(とろく) 鉱山跡近くで、水と大気両方の汚染に見舞われ集落のほとんど全戸が公害病にかかって、これまでに百人余りが平均39歳という若さで病死し、現在も数十人が病状を訴えている、と16日、甲府市で開かれた日教組の教研集会の席上、宮崎県教組西臼杵支部岩戸小学校分会の斉藤正健教諭(28)が発表した。「イタイイタイ病や水俣病に四日市ぜんそくを加えたようなもので、これらに匹敵する大変な公害が隠されていた」と学者も大きな注目を寄せている。17日、宮崎県から連絡をうけた環境庁でも対策を協議しはじめた。

1972年1月17日朝日新聞西部本社(夕刊) トップ

「集落ぐるみ鉱毒病 / 見放されて50余年 / 100余人が若死 / 今も苦しむ74人」

宮崎県西臼杵郡高千穂町の土呂久(とろく) 鉱山跡近くで、水と大気両方の汚染に見舞われ集落のほとんど全戸が公害病にかかって、これまでに百人余りが平均39歳という若さで病死し、現在も数十人が病状を訴えている、と16日、甲府市で開かれた日教組の教研集会の席上、宮崎県教組西臼杵支部岩戸小学校分会の斉藤正健教諭(28)が発表した。17日、宮崎県から連絡を受けた環境庁でも対策を協議し始めた。37年まで操業していた中島鉱業の亜ヒ酸鉱山跡で、発表によると、そこから出る有毒な亜ヒ酸の粉じんを住民が吸って呼吸器疾患になるとともに、坑口から出る亜ヒ酸を含んだ川の水を飲用水に使って内臓、神経疾患にかかっており、中には一家全滅した家もあった。50余年間苦しんだ住民は何回か苦情を訴えながら、会社側にも町や県当局にも取上げられず、現在まで泣寝入りの形だったが、同分会が初めてこの公害の「過去と現在」の全容を明らかにした。

「イタイイタイ病や水俣病に四日市ぜんそくを加えたようなもので、これらに匹敵する大変な公害が隠されていた」と学者も大きな注目を寄せている。

144-3 1972年1月17日の朝日新聞報道の背景

「記録・土呂久」の報道者群像「記者としてより人間として」P437—438より

岩戸小学校分会の齋藤は、72（昭和47）年1月16日、こんどは甲府市で開かれた日教組教育研究全国集会で発表した。その発表に基づく記事を、翌17日付の朝日新聞夕刊は社会面のトップに載せ、他紙に先がけて報道を全国化した。西日本新聞の安部裕人のスクープから2か月後のことである。「高千穂町（宮崎）に大型公害病 / 50年間に100人若死に / 鉾山の亜ヒ酸が原因？ / 呼吸器系などに異常 / 一時は『村の恥』と隠す」などの活字が見出しに躍っている。書いたのは名古屋本社社会部の竹内宏行。竹内は、当時岐阜県高山市の新上水道水源地の鉾毒汚染問題に取り組んでいた名古屋大学医学部の大橋邦和講師（公衆衛生学）と公害問題等で懇意にしていた。

その大橋が、鹿児島県の志布志湾に石油コンビナートをつくるという新大隅開発計画に反対する住民集会で講演するために鹿児島に下ったのが72年の1月初め。大分新産都市の公害を調べている高校教師の藤井敬久の車で志布志に向かう途中、大橋は藤井から齋藤の話聞いたのだった。1月6日、藤井の車で土呂久に立ち寄った大橋は、土呂久鉾毒のただならぬ状況を見抜き、名古屋に帰ると竹内に連絡、2人して1月16日の齋藤発表を聞きに行ったのである。その夜は齋藤の宿舎に同宿、スライドを使ってのレクチャーを受け、竹内は徹夜で原稿に仕上げ、朝、甲府支局から送ったのだった。「齋藤先生の熱がそのまま伝わり、自分の特ダネ意識とないまぜになって、夢中に行動していた」と述懐する。この記事は全国に衝撃を与え、20日付朝日新聞の社説は、「驚くべき鉾毒が明るみに出た」と書き出して、「土呂久鉾毒を放置したのはだれか」と問うている。

西日本新聞聞き書きシリーズ「山峡のシンフォニー」第20回（聞き手 中山憲康）

宮崎で配られた翌日（1972年1月18日）朝刊は1面トップを飾りました。「集落ぐるみ鉾毒病 / 見放されて50余年 / 100余人が若死」と大きな見出しとなりました。同月末、環境庁（当時）の土呂久調査団に同行してやって来た環境担当編集委員の木原啓吉さんが、記事掲載の経緯を話してくれました。

キーマンは「被害住民の存在を知らず放置してきた当局と鉾山側の責任はあまりにも大きい。……疫学的な因果関係は相当はつきりしている」との識者談話を出した名古屋大医学部講師（公衆衛生学）の大橋邦和さんでした。大橋さんは1月初旬に講演で鹿児島を訪れた際、土呂久鉾毒の話聞き、帰る途中に現地に立ち寄っていたのです。

ヒ素の被害を確信した大橋さんは、懇意にしていた名古屋本社社会部記者の竹内宏行さんを誘って、16日に甲府市であった全国教育研究集会に出掛けます。発表後に齋藤正健先生から詳しくレクチャーを受け、竹内さんが徹夜で原稿を仕上げたというのです。

扱いが難しい公害問題で、しかも管轄を越えた異例の取材でした。記事の判断を求めら

れた木原さんは「大橋さんの談話は信頼できる」とゴーサインを出したそうです。報道当日から、各社入り乱れての報道合戦となりました。

西部本社から派遣された社会部記者たちは、インパクトのある記事を出し続けました。一方の僕は、土呂久の住民から亜ヒ酸製造が始まった頃の旧岩戸村長が存命だとの情報を得ます。既に隠居していた甲斐徳次郎さんを訪ねました。

144-4 1972年1月17日の朝日新聞報道の関係者

大橋邦和さんの話（1986年11月10日、名古屋市中区の大橋宅で聴取）

1972年正月が明けてすぐ、のんびり酒を飲んで過去を振り返るつもりで鹿児島から指宿に行った。九州とのつながりは、臼杵市に大阪セメントが進出する話を聞いて、同僚の田中豊穂先生と現地を見に行った。そのとき大分が新産都市計画で揺れていることを知り、開発反対でやっている藤井敬久先生と何回か調査することになった。そんなことがあり、沼津の西岡昭夫先生（1964年の三島・沼津石油コンビナート反対運動で中心的な働きをした）と二人で鹿児島に行った。藤井先生と大分で飲み、次に喜入町で鹿児島交通に勤めていて石油備蓄基地に反対運動をやっている人（郷原茂樹さん）と飲み、次の日に志布志の集会に引っ張り出された。この旅行のとき、藤井先生から「宮崎にキチガイの先生がいるぞ」と聞かされた。志布志に西岡、田中、藤井先生は残り、ぼくだけ1人で土呂久へのぼった（注・藤井先生の記憶と異なる）。志布志から列車で延岡へ。延岡の朝日新聞で聞くと、ていねいに教えてくれた。岩戸小学校に行くと、冬休みで、齋藤先生は里帰りしていた。当直の先生の対応がおかしい。「岩戸分会では支えられていない」「孤立させられているな」「このままではつぶされるぞ」と感じた。現地に入った。民家を訪ねた。若い人を何人か見た。その子に聞こうとしても、家族がしゃべらせてくれない。一目見て、顔に生気がないし、異常だと感じた。上水道はどこかと聞くと、「ズリ山のすぐ下だ」という。汚染源の水を飲んでいる。坑内水がどんどん流れ込んでいる。土呂久川をのぼるとき、川がおかしい。岩が白い。岩苔がない。普通じゃない。「魚は今もいません」というのは、ただごとじゃない。鉾山の中に人が住んでいる。こりゃ、ひどいよ。飛騨高山の鉾山でも掘っていたとき1000人くらい住んでいたが、飲料水は他の山から引いていた。ズリの下から水を飲むなんてことはやっていない。齋藤先生には会えなかったが、岩戸小で甲府の全国教研で発表すると聞いて帰った。＜教研集会に行かねばならぬ。このままでは齋藤先生が孤立するぞ＞。名古屋に帰って、朝日新聞名古屋本社の竹内宏行記者に「あいっているなら、ぜひ行こう」と誘って強引に連れ出した。竹内記者は公害担当の記者。飛騨高山の上水道では、逆に竹内さんから引っ張り出された。竹内記者に記事を書かせてから「もう抜けられない」と思った。

竹内宏行記者の話（1986年11月10日、名古屋の大橋宅で聴取）

経歴：1965年毎日新聞入社、地方記者5年。70年朝日新聞に移る。71年公害担当の遊軍。その後、県政担当。津支局にでて東京へ。6年半で戻ってきて、86年当時遊軍キャップ。

大橋先生から話を聞かされて、教研の担当じゃないし、半分は記事にする気はなく、勉強になればいいという気持ちで出かけた。大橋先生と高山の現地を見て、1年くらい世話になって信頼関係ができていた。朝、名古屋を出て、浜名湖から富士山を見て、河口湖まわりで行った。御坂町の小学校が分科会の会場で齋藤先生の発表を聞いたかどうか記憶にない。夜、スライドを見せてもらいながら話を聞いた。2, 3時間話を聞いたあとで迷った。大橋先生から「竹内君、あんたが書かないかん」と言われて踏ん切りがついた。内容がうそだという気持ちはまったくなかった。齋藤先生は、全国レベルの問題に持って行きたいと考えていた。迫力があつた。その熱心さが心を打った。ふつうなら利用しようという下心やかっこよさが目につくが、そのまったくくないところに好感がもてた。土呂久が齋藤先生にのりうつり、齋藤先生の熱情が大橋・西岡先生をつき動かして、その代弁者として私が書いた。記者の良心と特ダネ意識で徹夜で記事を書いた。原稿用紙を持っていなかったのてノートに書いた。朝いちばんに木原啓吉さんに電話した。四日市公害を環境庁の大石長官が視察に来たとき、木原さんと一度だけ会っていた。「大変です、大変です」と電話しといて、甲府支局に行ってノートをだして東京に送稿した。教研集会のキャップはいま社会部長（のちに論説委員）の柴田鉄治さん。すごくいい人だった。容量の大きな人で、にこやかに応じてくれた。雑感も書いた。東京と名古屋は社会面トップ、西部は一面トップ、大阪は一面4段の記事。朝日が抜いて、マスコミ他社がソッポを向くのがこわかった。時代は公害を取り上げる方向、高度経済成長のひずみをきちっと直そうとして、世論が公害をとりあげる方向に向いていた。これだけの公害をほおっておくはずがない、と思った。

藤井敬久さんの話（大分工業高校定時制）教諭の話（1986年11月11日大分市内で聴取）

1971年12月に天草の本渡で九州地区の公害教育に関する研究発表会があった。当時鶴崎高校に勤務していた私は、大分から2人、日帰りで参加して齋藤先生の発表を聞いた。小さな部落の中を1軒1軒丹念に回って、大きい地図に死亡者のことを書き込んで、よく整理されていると直感的に感じた。素朴な田舎の小学校の先生が、詳しく調べているのにびっくりした。そのとき、翌年1月の全国教研で発表すると予告した。

私は社会科の教師で、大分新産都が稼働し始めて1号地、2号地、背後地の公害が問題になった。私は、高校のあった鶴崎でぜんそく患者、悪臭、川・海の汚濁の調査をした。県教研で発表するために「鶴崎の町を考える会」をつくって10人くらいで取り組んだ。医師の専門家がないので、名古屋の大橋先生が来てくれるようになった。この発表で天草に行った。西日本新聞をとっていないので、天草に行くまで土呂久のことは全然知らなかった。天草で話を聞いたのは、まったくの偶然。

1972年1月6日に、鹿児島県の志布志で新大隅開発反対の旗揚げの市民・漁民大集会をやることになった。喜入の石油基地反対をやっていた郷原茂樹さん（鹿屋日報の記者、奄美大島出身、奄美独立運動をやっていた）が、その集会の講師の世話をしていた。講師は、①名古屋大学大橋邦和講師、②同田中豊穂先生（のちに中京大体育学部スポーツ医学）、③沼津の西岡昭夫先生（三島・沼津コンビナート反対の中心）、④大分の藤井。4日に鹿児島空港で落ち合った（藤井が車、3人は飛行機）。その晩、指宿で泊まって、遅くまで話した。そこで齋藤先生の話を出した。大橋先生は、飛騨高山の水道水問題に取り組んでいた。「日本全国どこかに同じ問題があるはず」と思っていたという。「九州にあったのか。行こや！」。5日に4人の講師は、昼は志布志の金剛寺、夜は柏原で講演して日程をこなし、翌日の大集会には参加せず、6日の朝早く藤井の車で出発し、大橋、藤井、西岡の3人（プラス田中？）で土呂久に行った。途中、延岡の朝日新聞の支局によって、土呂久のことを聞いた。岩戸小にも寄った。冬休みで齋藤先生には会えなかったが、当直の先生は「齋藤先生が先走って困っている」というふうに言った。土呂久には昼前についたと思う。途中で見た川は白っぽかった。新窯は壊した直後だったが、ズリ山はまだあった。土呂久は大分の新産都とは感覚が違う。「公害」というと、工業都市の問題だと思っていた。足尾銅山のようなこともあるので、鉱山で起こるときはある程度予想がつくが、土呂久は大規模鉱山ではなく手工業的な鉱山でしょう。帰りに延岡で、大橋先生は名古屋の朝日の竹内記者に土呂久のことを電話した。夜8時に大分に帰りついた。疲れが出てげっそりしたのを覚えている。

コンビナート闘争の理論的支柱・西岡昭夫さん（インターネット「パイプオヤジ」より）

石油化学コンビナート進出計画で、反対闘争を理論的に支えた教員グループの一人で、その後も行政の環境政策などの問題を指摘し続けた西岡昭夫さんが（2015年10月）十日、入院先の静岡医療センターで死去した。八十八歳。

一九二七年九月、戸田村に生まれ、旧制沼津中学（現沼津東高）から陸軍士官学校へ進んだ。敗戦後、中央气象台附属気象技術官養成所（現気象大学）、東京理科大を卒業後、静岡県の高校教師となった。沼工在職中、沼津市、三島市、清水町へのコンビナート建設計画が発表されると、石油化学コンビナートが喘息などの公害を招いた四日市に行き検証。沼津への進出反対運動の先陣を切った。計画を疑問視する国立遺伝学研究所の松村清二博士を中心とする地元研究者で構成する松村調査団に加わり、国が委嘱した黒川真武博士を中心とする産業公害調査団、いわゆる黒川調査団と相対した。この計画で西岡さんは、牛臥海岸への東京電力火力発電所について、沼工の生徒や保護者の協力を得て、こいのぼりによる風向、風力などの調査資料を基に、黒川調査団の矛盾点を指摘。さらに松村調査団は、沼津地区の気流の特異性などを挙げて黒川調査団を論破。加えて沼津医師会や漁業者、市民の強力な反対運動もあり、国は計画を断念した。これは後に、日本で初めての住民運動として沼津の名前を全国に知らしめた。

その後、三島北高、葦山高で教えたが、葦山高在任中、心筋梗塞を発症し五十九歳で退職。その後、研究の道に入り、名古屋大と宮城教育大で講師を務めた。その傍ら、地元の問題として、富士山裾野への富士サファリパーク進出や愛鷹山麓へのゴルフ場開設、柳沢へのゴーカート場建設、千本松原内へのサイクリング施設建設、志下地区水産加工場からの廃液による塚田川水質汚染など多くの環境問題に取り組み研究。最近では、沼津駅付近鉄道高架事業、ごみ焼却含む新中間処理施設整備事業に対する問題点を指摘するなど一貫して環境保護の立場から、沼津朝日新聞紙上を通して様々な提言をし続けた。

環境保全と労働安全の分野で社会的不正義をなくすために熱意ある取り組みをしている個人、団体の活動を顕彰する「田尻賞」第1回で表彰を受けた。

【沼朝平成 27 年 10 月 14 日(水)号】